# ゲット・アウト

## GET OUT




何かがおかしい











『インシディアス』『ザ・ギフト』『ヴィジット』のジェイソン・ブラムが製作!
アメリカの人気お笑いコンビ"キー&ピール"のジョーダン・ピール衝撃の監督デビュー作!!
製作費500万ドルで全米初登場No.1大ヒット!!!
米映画レビューサイト・Rotten Tomatoesで99%大絶賛!!!!

# 映画の常識を覆すサプライズ・スリラー 遂に日本上陸!!!!!

## STORY

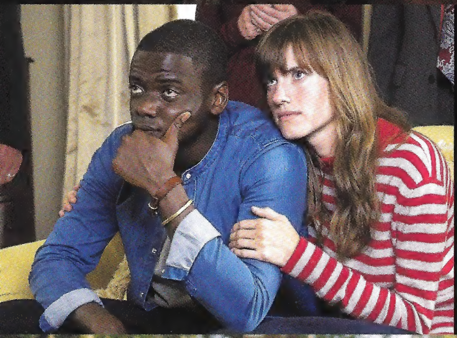
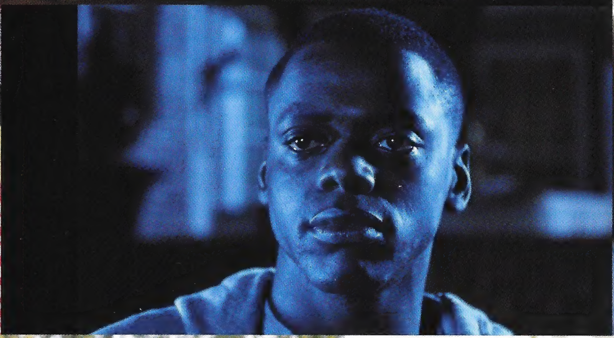
ニューヨークに暮らすアフリカ系アメリカ人の写真家クリス(ダニエル・カルーヤ)は、週末を白人の彼女ローズ(アリソン・ウィリアムズ)の実家で過ごすことになる。ただ、ローズは両親に彼氏が黒人であることを伝えておらず、「両親は差別主義者じゃないし、父は三期目があればオバマに投票するような人」だと言うが、クリスは若干の不安を拭えない。実家までのドライブ中、運転していたローズが野生の鹿をはねてしまう。駆けつけた白人の警官は黒人のクリスに無礼な態度をとり、ローズは怒りを露わにするが、ことを荒立てたくないクリスは警官に従う姿勢を見せる。

ニューヨーク郊外にある実家は緑に囲まれた広い敷地を持つお屋敷で、ローズの父親ディーン(ブラッドリー・ウィットフォード)と母親ミッシー(キャサリン・キーナー)はクリスを大歓迎。しかし、そんな態度とは裏腹に、黒人の管理人ウォルター(マーカス・ヘンダーソン)と家政婦ジョージナ(ベッティ・ガブリエル)を雇っていることに、クリスは妙な違和感を覚える。さらに、クリスに対して、ディーンは殊更に黒人を持ち上げる発言を繰り返すが、逆にローズの弟ジェレミー(ケイレブ・ランドリー・ジョーンズ)は差別的な態度で挑発してくる。家族の過剰反応に心を痛めるローズに、クリスは「気にするな」と慰める。

その夜、タバコを吸いに外に出たクリスは、一言も発することなく、庭を猛スピードで走り去るウォルターに驚く。振り返ると、窓ガラスに映る自分の姿をじっと見つめるジョージナが恍惚の表情を浮かべていた。屋敷に戻ったクリスは、不意に精神科医でもあるローズの母ミッシーから禁煙のための催眠術治療を受けることに。催眠術などまったく信じていないクリスだったが、幼い頃に母親を交通事故で失ったトラウマを掘り返され、動揺している間にそのまま気を失ってしまう。

翌日、実家では、ローズの亡き祖父を讃える年に1度のパーティが開かれる。裕福な白人ばかりで気が滅入っていたクリスは、唯一の黒人の若者を見つけて話しかける。ローガンと名乗る若者は不自然に古風な服装で、かなり年上の白人の妻を同伴しているが、会話もどこか噛み合わない。さりげなく、クリスはローガンの写真を撮ろうとすると、携帯のフラッシュがたかれた瞬間にローガンが豹変し、鼻から血を流しながら「出ていけ!」と襲いかかってくる。"何かがおかしい"と感じたクリスは、ローズと一緒に実家から出ようとするが……。



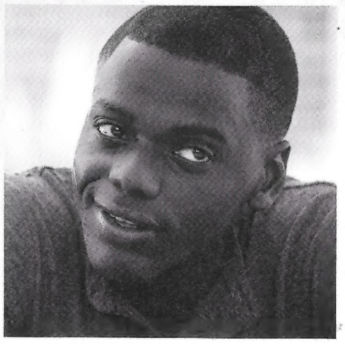




# INTERVIEW
# DANIEL KALUUYA

## 化け物や悪霊より恐ろしいもの

**ダニエル・カルーヤ**
**〈クリス・ワシントン〉**



**──ホラーというジャンルに人種問題を持ち込んだユニークな映画ですね。**

「よくホラー映画には化け物やら悪霊やらが登場するけど、現実の世界では、人種差別ほど恐ろしいものってないような気がするんだ。いまだに黒人の若者が警官に殺されることがあるが、それを大して気にも留めない人がいる。母親が全国放送で涙を流していても、ニュースキャスターが泣き真似じゃないかと疑うような姿勢を見せる。それって差別だし恐怖でしょ」

**──こうした問題を直視し、それについて語るには、映画やテレビを通じて娯楽という形で社会の現実を見せる必要があるのでしょうか?**

「みんなが思いをありのままに語れる場は必要だと思う。最終的には、その人の人生経験にかかわらず、誰もが自由にものが言える手段や環境が整った社会になるべきで、この映画はその叩き台になれるんじゃないかな。なにしろ、こういうことって現実にどこででも起こり得るからね。みんなが『あの映画、観た?』『こんな気分になった』『あのシーンでどう思った?』なんて話題にするところから始めてくれるといいな」

**──映画の前半では特に、50年も前に公開された『招かれざる客』と同じテーマに触れています。これだけときが経ちましたが、何が変わったのでしょう?**

「変化の有無を年数で測るのは、ちょっと違うかな。2017年になっても昔とまったく同じことが起きているかというと嘘になるし、そもそも起きているという事実自体が問題なわけじゃないと思うんだ。問題はむしろ、それを許してしまっている個人の視点や社会であるし、とかく差別とは無縁の恵まれた立場にいながらそれを無視する人たちだ。そこに向き合わない限り、問題は永遠に続くよ。ちなみに、特に変化したのはテクノロジーだよね。アメリカやイギリスのみならず世界中の国々が、特定のニュースチャンネルを通じてフィルタリングされた情報を、その国を代弁することであるかのようなフリをして配信しているけど、それに唯一対抗できるのがテクノロジーだと思う。おかげで今は、より多くの人が、より多くの声を発信できるよね」

**──一方で人種や住む場所に拘らず誰もが遭遇する、恋人の親に会うというテーマも描かれています。そういう経験はありますか?**

「幸いずっと忘れてたけど、ガールフレンドの父親に交際を反対されたことがあるよ。お父さんにしてみれば、かわいい娘にとっての初めての彼氏だったからね。彼女と芝居を観に行ったら、こっそり後をつけられて、劇場の外で待ち伏せされたんだ。彼女はお父さんに内緒にしていたらしくて、お父さんは怒って彼女を連れ帰ろうとしてね。そんなこんなで、ちゃんとお父さんに紹介される間もなく、彼女とは何となく別れちゃった」

**──恋人の両親に初めて会うときのコツってあるものでしょうか?**

「まあね。でもやらない。嘘をつき通すような羽目になったら、かえってつらいもの。だからありのままの自分を見せるようにしている。そして誰に対しても尊敬の念を持って接するように心がけている。そうすれば、特定のタイプの人だけをえこひいきする心配もなくなるよね。尊敬に選り好みは要らないでしょ」

**──面白いのが、クリスという役柄はずっと落ち着いていることです。**

「受け身ってわけじゃなくて落ち着きだよね。監督の意向だったんだ。特に、現実社会にはいわゆる"日常的差別"がある。つまり、あからさまに差別用語で罵倒されるということじゃなく、むしろ相手にしてみれば、自分を歓迎してくれているんだけど、実は肌の色を意識して特殊な扱いをしてくれちゃって、結果的に自分はかなり疎外感を味わうという状態。そういうときって落ち着いた態度をとるしかないよね。だって公然と差別されているわけじゃないし、そもそも相手はそれが差別的だと教わってないんだから、こっちも『居心地悪いんだけど、ちょっと言えないなあ』って思うよ」

**──クリスの友人ロッドはどんな役柄なのでしょう?**

「彼は観客の声を代弁してるんだけど、誰にでもいるであろう、本音でものを言ってくれる友達でもあるよね」

**──そういう友達はいますか?**

「もちろん。でも、こっちがそいつに耳を傾けるとは限らない。友達は距離を置いて物事を見てるからああ言えるんだろうけど、こっちは状況にドップリ感情移入しちゃってるから、そう簡単には説得されないんだよね。そういう面でもジョーダンの脚本は最高。誰が観ても『あるある』の連続だ」

(翻訳・構成:久保田祐子)

# INTERVIEW
# ALLISON WILLIAMS

## 正しいのは“見えない”ではなく“判断しない”こと

**アリソン・ウィリアムズ**
**〈ローズ・アーミテージ〉**



**──ホラーについてはどんな思い出がありますか?**

「小さい頃はいつも『誰かが墓地からやってくる』を読んでいたの。挿絵がお話以上に怖かった! 最近になってホラーの奥深さに改めて気づいたんだけど、ひとたび怖さを克服したら、ホラー映画にこそ傑作が多いんだとわかったわ。今は飛行機に乗ったときにホラー映画を観るわね。あの小さな画面で観ると生々しさが軽減されて怖くないから。でも『ゲット・アウト』は是非劇場で、大勢の観客と一緒に『キャーキャー』言いながら観てほしいの」

**──本作ではクリスが彼女の両親に会いに行くという大冒険を味わうわけですが、ご主人のご両親に初めて会ったときはどうでした?**

「夫のリッキー(・ヴァン・ヴィーン)の両親とは、彼と付き合いだして間もなく会ったんだけど、実はそのときから私は彼と結婚するとほぼ確信してたの。だから未来の義両親に会っている気分だった。即、馴染めたわよ。上手く言えないけど、とっても自然だった」

**──ローズという役柄は人種問題に馴染みがなく、意識する必要すらないと考えています。**

「ローズのような考え方はもう流行らないわね。今や、社会の意識は変わりつつある。『見た目の違いなんて見えない』というのは嘘で、『見た目の違いは見えるけれど、それでその人を判断する気はない』が正しい考え方だということを、みんながわかってきた。でもローズはまだ前者のタイプで、『なぜ親にわざわざ黒人だということを事前に知らせるの?』って感じ。一方でクリスは経験上、それが大事だと思っている。だけど、ローズも徐々にクリスの視点でクリスと一緒に、世界を見つめるようになっていく。それと同時に、黒人ではない観客も、そんな経験を共有していけるはずよ。事態が飲み込めていくにつれて、クリスでいること(=黒人であること)の感覚をつかんでいけると思う」

**──『招かれざる客』が公開されて50年、いまだに人種問題を語っているとは悲しいですね。**

「いまだに人種でその人の価値が、良きにつけ悪しきにつけ判断されているのは確かに悲しいわ。それに、そういうことについて話し合うのは必ずしも気持ちのいいことじゃないかもしれない。でも話すのは大事だと思うし、一人一人が自分自身に問いかけるべき問題だと思うの。それに、気持ちが良くなくたっていいじゃない。社会の一員としてバランス感覚のある人間になるためには大切なことなんだから。そこはさすがジョーダン監督よね。人種問題をホラーという娯楽に盛り込むことによって、みんなに考えさせようとしている。もちろん、自分がうっかりバカなことをしていたとか、失礼なことや過ちを犯していたと知ったら、いやなものだわ。でも、みんなが気持ち良く暮らせる社会を実現するためには、まずは意識を持つことから始めないとね。そういう意味でもこの作品の意義は、映画館を出てから現われるの」

**──本作は場違いでいることも描いていますよね。自分が場違いだと感じることはありますか?**

「そんなのしょっちゅうよ(笑)。子供の頃からね。演技大好き少女でダサかったの。女の子同士の付き合いみたいなのも苦手で、いつもリーダー格の子を怒らせていたし、かといって男の子を見る目もなかった。今も(教育機会均等を目指す)チャリティ事業をやる度に自分は場違いだって思うしね。おかげで、合わない教育システムでダメになっていく子供を黙って見過ごす経験はせずに済んでいるわ。ただ、場違いでいることって、役者としての仕事の一部でもあると思っているの。出演中のTVシリーズ『ガールズ』でも主人公ハンナが円を描いて言っていたわ。『この中が安全地帯。そして円の外でこそ奇跡は起こる』って。実際、安全地帯から離れて場違いな気分を味わう度に、心に残る体験をしている気がする。大学時代の夏休みにガーナへ行ったときも、先日、ケニアとルワンダに行ったときも、なにしろ旅をする度に強烈な経験をしているわ」

**──催眠術にかかったことはありますか?**

「いいえ。どうも信用できない。正直、ご免だわ(笑)」

(翻訳・構成:久保田祐子)

# INTERVIEW
# JORDAN PEELE

## ホラーから聞こえてくる黒人の声

**ジョーダン・ピール**
**〈監督・脚本・製作〉**



**――本作が『招かれざる客』から50年目にリリースされたのは偶然ですか？**

「そうだったのか！ いや、それは偶然。ちなみに『ナイト・オブ・ザ・リビング・デッド／ゾンビの誕生』からも50年だけどね。まあ、世の中が変わってないってことかな。人種差別というモンスターがまだ健在なんだ。その形が変わっただけ」

**――しかし本作は人種差別の話かと思いきや、それに留まりません。**

「その通り。『招かれざる客』があれだけ共感を得たのは、キャストやスタッフが見事だったというのもあるけど、描いているのが人種問題でありながら、誰もが遭遇しそうな状況だからだと思うんだ。未来の家族に会うのは誰だってビビることだからね。今回の脚本を書くにあたっても、人種という具体的な小道具と普遍性との両方をきっかけにすればいいと気づいたときに閃きを感じたんだ」

**――もともと何を描きたかったんですか？**

「疎外感を描きたかったんだ。人種云々よりも、人生を共有してきた集団の中に入る感覚をね。内輪ウケのギャグを楽しむような人たちとも、ある程度は気持ち良く付き合っていきたいんだけど、それでいて、その人たちが共有してる背景が不可解で仕方ない。それってホラーの題材として最高だと思ったんだ。そこに人種問題を取り入れたら面白いんじゃないかって気づいたのはしばらくしてからだった。前代未聞の、人種についてのホラー映画を作ってやれってね」

**――ホラーは子供の頃から好きでした？**

「『エルム街の悪夢』『シャイニング』『ザ・フライ』なんかを観ちゃ、眠れないほど怖くなってたよ。で、12か13歳の頃だったかな。そこまで強烈な刺激を与えてくれるものって尋常じゃなくすごいって思うようになったんだ」

**――クリスはホラーの主人公のわりに落ち着いていますが。**

「クリスには現実感を持たせたかったんだ。人って本来、ああいう姿勢を見せるんじゃないかな。彼は勘が鋭くて、賢くて、常に工夫していて、見ているこっちが苛々するようなバカな行動はとらない。そのうえ、愛する女性の実家に行けば、やっぱり何が起きても素直に受け入れようって気持ちになるものでしょ。よほどのことがないと、そこを去ろうとは考えないよね」

**――結末は初めから見えていたのですか？**

「いや。恐怖はどこから来るのか、特に黒人男性にとって恐怖の源となり得るものを、地道に突き詰めていったら、ことの真相がはたと閃いたんだ」

**――観客の代弁者とも言えるロッドについては？**

「突飛な設定を現実に引き戻してくれる役柄だ。ホラー映画を観ながら画面の主人公に向かって、じれったい思いで叫んだことのある人たちにも満足してほしくてね。（演じた）リルレル・ハウリーのことは会った瞬間に、イメージ通りだと思ったよ」

**――人種についてもう少し聞きたいんですが、クリスやロッドが白人だったら、習慣として、違う反応を示したかもしれないとも考えたのですか？**

「それについては結構考えた。『ゲット・アウト』というタイトルは『悪魔の棲む家』の有名なキャッチコピーにちなんではいるんだけど、実はエディ・マーフィのネタも意識してるんだ（訳注：映画に登場する白人はオバケが出てもその家に留まるが、黒人は『出ていけ』という不気味な声が聞こえたらすぐに逃げる点を指摘したネタ）。この映画はホラーという状況の中での黒人の声を反映している。だから、登場人物がバカをやる度にイラつく黒人のホラー映画ファンを意識した。それと、とかく我々黒人が味わう疎外感も、あの“沈んだ場所”なんかを通じて象徴的に描きたかったんだ。暗い映画館で画面に向かって『出ていけ！』と叫んでも、あっちの世界には届かないよね。そういう点でもいろんな意味を込めた映画なんだよ」

**――ローズという役柄の位置づけは何でしょう？**

「あの役は特に重要で、人種が違う恋人を初めて持つ者が遭遇するさまざまな体験や目覚めを表わしてるんだ。この映画を観る人たちには、是非それも一緒に味わってほしい。違う人種と交流する人の多くが、こうした微妙な状況や感情にさらされるんじゃないかな」

（翻訳・構成：久保田祐子）



# REVIEW

## GET OUT!〈出ていけ!〉されるのは俺か？

**平山夢明**
（ホラー作家）

いやあ、実に真面目なホラーでしたね。コメディアン出身監督のデビュー作ということになれば相当、食べづらいジョークを連発するのかと思いきや。真面目な実に真面目なヘイトホラーでした。この人種差別というテーマは『ミシシッピー・バーニング』や『招かれざる客』を始めとしてハリウッドでは「まだ正常な人間は生き残っているぞ！」とか「みんな目を覚ませ！」といったアメリカの正気を確認させるものとしてたくさん作られてきました。日本ではそもそも触れることをタブーにしてしまっているおかげで表現する自由も木っ端微塵になっていますが、さすが移民大国。あちらではジョークにも差別ネタというジャンルがあって、例えばトラックから積み荷のボーリングの球が落ちてしまい驚いた運転手が飛び降りると、こちらにやってくるポーランド人グループを見つけます。「大変だ！ 手伝ってくれ！」運転手が云うとポーランド人達は大急ぎでボーリングの球を石や棒で叩き割ってしまうのです。唖然とした運転手が、なんてことするんだと抗議すると「だって黒人が孵っちまうじゃないか」と答えるのです。読んでいても目が潰れるような勢いのあるネタですが〈現存するもの〉として笑いの俎上に上げる土壌があちらにはあるわけですね。監督・脚本のジョーダン・ピールは本来は差別ネタを得意とするコメディアンですから、こうしたものの取り扱いには長けているわけです。そして本作では利き腕のヘイトコメディを封印し、徹底したヘイトホラーへと転換させたわけです。元来、〈笑わせること〉と〈怖がらせること〉は観客を攻撃するという点では求めるゴールが違うだけで方法論的には共通する部分が多いと思います。ピールはその辺を実に敏感に巧緻に造り込んでいます。また拷問室の調度や楽曲など随所にスタンリー・キューブリックの『シャイニング』や『アンダー・ザ・スキン 種の捕食』のジョナサン・グレイザーの影響も見て取れ、彼が如何に本作を凡庸なヘイトホラーの枠から抜け出させようとしていたのかが窺えます。これらは通常のヘイト物のツールとされる『黒人嫌い』『リンチ』『使役』『KKK』といったステレオタイプを使わなかったことからも確かです。〈白人女性と恋に落ちた主人公が彼女の実家に誘われる。なぜか彼女は両親に彼が黒人であることは告げていない。でも彼女は両親は黒人が大好きだから大丈夫よと太鼓判を押す〉これだけですと前述したシドニー・ポワチエ主演の『招かれざる客』の換骨奪胎なのですが、あちらと違うのは両親は決して〈変わらない〉ということ。ここが本作のホラーの要であり、現実のアメリカ社会の差別の本質が〈品性〉という厚化粧の下に隠された〈下劣さ〉であることを強烈にアピール

しています。これを特に象徴しているのが恋人の母親が手にするティーカップのセット。彼女はやたらとティースプーンをカチャつかせるわけですが〈洋画では紅茶を手にしてニヤニヤしている女は大抵、変です〉、向こうの諺で『銀のスプーンを咥えて産まれてくる』というのがありまして、これは食べものの心配がない幸せな子、という意味であると同時にそのような〈血筋〉に生まれついたことも意味します。黒人奴隷を使っていた大農園主たちは勿論、この血筋であるわけでして、こうしたところにもピールの説明ではなく描写で納得させようという気配りがあるわけです。このように本作における監督の手腕の凄さのひとつに〈違和感へのグラデーション〉があります。通常、人はあまりに強烈な違和感に晒されると逃げたり、拒絶したりといった行動をします。しかし、本作は実家自体が巨大な〈蟻地獄〉なわけですから獲物を簡単に逃がすわけにはいきません。が、当事者にとっては次々に違和感や云いようのない不安が迫ってきます。この辺りの火加減が作品の深みと奥行きに密接に関係してくるわけです。これが下手ですと単なるお化け屋敷映画となり、結果、惨劇のインフレを起こし、なにやらハデハデしく、ケバケバしいが面白くなかったで終わってしまいますが、ここのストレスを発生させる事象のドミノ並べが絶妙であると大きなことは起きないが異常なまでの緊張と不安を主人公(観客)に与えることができる。つまり第一級のスリラーとして成立するということなのですね。本作ではこれが実に巧くできていることと更に憎いのは観客がストレス慣れするのを防ぐために中盤からコメディーリリーフが登場して笑わせることで感情の振れ幅を大きくさせるのです。ここでも笑いのシーンのお尻が次の緊張させるシーンにまで引きずらないようにしっかりと都度都度でオチをつけていきますし、お笑い担当の動きがいつのまにか伏線の回収や警官対応などのリアリティの補強になっていることが巧みです。つまり観客にとってわざわざ〈無駄なものを見せられて〉笑わされていると云った作品に対しての負の感情をもたせないよう計算されているのです。

主人公を救うのが〈綿〉であったり、差別主義者に対抗できる唯一のものが携帯写真であるなど監督の差別への抵抗が物語を邪魔することなくちりばめられているところも素晴らしい。クライマックスの畳みかけも観客に腹一杯喰わせて帰って貰おうという盛りの良さ。観終わった後にわかる〈ゲット・アウト〉の真の意味。単なる若さと情熱だけで手がけられるものではない一流のエンターテイナーが勝負を賭けた精密機械のような作品、久々に脱帽だ!

REVIEW

## ジョーダン・ピールが向き合う絶望的な現実

**町山智浩**
（映画評論家）

2017年にアメリカで最も稼いだ映画（製作費450万ドルで全米で興収1億7千万ドル）になった『ゲット・アウト』のジョーダン・ピール監督は、主人公クリスにエディ・マーフィーをイメージして脚本を書いた。というのも、エディ・マーフィーのスタンダップ・コメディ記録映画『ライブ！ライブ！ライブ！』（83年）のギャグから思いついたからだ。マーフィーは大ヒットしたホラー映画『悪魔の棲む家』（79年）について話す。「その呪われた家に入ると、どこからともなく『ゲット・アウト（出て行け）』って声が聞こえるんだよ。それなのに主人公の夫婦はその家に住んじゃうの。どうかしてるぜ」

このライブは首都ワシントンの憲政会館で2万人を集めて行われた。当時マーフィーは21歳だった。ジョーダン・ピールはまだ4歳だったのでリアルタイムでは観てないだろうが、マーフィーには大きな影響を受けたと言っている。成長したピールはコメディアンになり、キーガン・マイケル・キーとキー＆ピールというお笑いコンビを結成、コント番組を始めた。

彼らのコントには人種ネタが多い。たとえば、キーが夜道を歩いていると黒人だというだけで警官に職質され、何もしなくても逮捕されそうになるが、次元の裂け目からニグロ・ランドに迷い込む。そこは黒人が人間として扱われる夢のパラダイスなのだ！このコントは明らかに、エディ・マーフィーが84年に「サタデーナイト・ライブ」でやったコント「ホワイト・ライク・ミー」にヒントを得ている。特殊メイクで白人になりすましたマーフィーが買い物に行くとどこでも「いや、お代は結構です」と、何でもタダ。銀行に行けば条件なしでいくらでもどうぞどうぞと貸してくれる。アメリカは白人の楽園だったのだ！

黒人コメディアンは多いがキー＆ピールは二人とも父が黒人で母が白人なので、どっちからも除け者にされて居場所のない悲しさが彼らの笑いを作っている。特にピールは白人の母がシングルマザーとして育てた。肌の色だけで黒人扱いされ、時に怖がられ、時に音楽的才能や運動神経を過剰に期待される面倒くささと辛さもピールのギャグのネタになっている。

この『ゲット・アウト』も、そうしたコントの延長にある。冒頭、黒人青年が瀟洒な高級住宅街に迷い込んで怯えているのは、住民は白人ばかりで、黒人が一人で歩いていたら、それだけで通報され

て逮捕されてしまうからだ。

「生垣の迷路みたいだ」というのはスタンリー・キューブリック監督『シャイニング』(80年)のこと。ピールは重度の映画オタクで、映画ネタのコントが多い。ラジオから流れてくる「ラン、ラビット、ラン」は1939年の歌で「ウサギのパイにされないように逃げろ」という歌だが、ピールはきっとロブ・ゾンビ監督『マーダー・ライド・ショー』(03年)が好きなんだろう。拉致した女性にウサギの着ぐるみを着せて「ラン、ラビット、ラン」と歌いながら狩りたてるのだ。

メイン・タイトルの歌はスワヒリ語だが「出ていくんだ。逃げろ」という歌詞で、ピール曰く「祖先が警告してるんだ」そうだ。

ローズにはねられた鹿をクリスが震えながら見つめるのは母の交通事故のトラウマが蘇ったからで、後半の伏線。警官がなぜかクリスの身分証明証を求めるのは白人女性を連れた黒人男性を頭から疑っているからで、ラストの伏線になっている。

ローズの実家アーミテージ家の庭で談笑するクリスたちに黒人のメイド、ジョージナがアイスティーを注ぐ。黒人の庭師ウォルターが芝刈りをしている。アイスティーは南部の名物で、これは南部の奴隷農園の典型的な風景だ。ジョージナたちは「アーミテージさんたちは私たちを家族として扱ってくれます」というが、同じことを奴隷たちも言わされていた。

近所の人々を招いてのパーティ。白人の老夫婦ばかりで誰もが黒人の肉体を称賛する。ローズの祖父も陸上選手だったが、ジェシー・オーエンスに敗れたという。オーエンスは1936年のベルリン・オリンピックで4冠を獲得し、「五輪で白人の優位性を示したい」というヒットラーの野望を打ち砕いた。しかしその後もオーエンスは黒人差別に苦しんだ。

「黒人は足が速い」というのは人種的偏見で、「ユダヤ人はケチ」「ポーランド人は怪力」などと同じことだ。ちなみにアジア人に対する偏見は「チンコが小さい」。そして黒人はその逆。「あの噂は本当なのかしら」老婦人が品定めするようにクリスに触りながら言う。「あっちのほうがすごくいいって」

「黒人のチンコだけが欲しいから頭を取っちまって性奴隷にしようとしたんだ」

クリスの親友ロッドが電話でジェフリー・ダーマーの話をする。91年に逮捕された殺人鬼ダーマーは拉致した黒人男性をロボトミー(脳の前頭葉を切除する手術)する生体実験を繰り返していた。

白人の客たちがビンゴをしている。だが『ルーツ』や『マンディンゴ』、『ヤコペッティの残酷大陸』を観たことのある人には黒人奴隷の競売にしか見えない。キー&ピールの番組でも彼らが奴隷市場で売られるコントがあった。やせっぽちのキーとデブのピールには最後まで買い手がつかない!

客の中に妙に若い黒人ローガンと老婦人の夫婦がいる。クリスがフィスト・バンプ(拳をぶつけあう、若者が好む挨拶)で拳を出しても、ローガンはそれを握ってしまう。ジョージナは「チクる」というスラングがわからない。「告げ口屋さんのことね」とお婆さんみたいなことを言う。

しかし、その二人の心の奥底に閉じ込められている何かが噴き出しそうになる。ジョージナは涙を流し、ローガンは叫ぶ。ゲット・アウト!

当初、エンディングは絶望的なものだった。それは『ゲット・アウト』のDVDに収録されている。DVDの副音声でピールはこう話している。

「この脚本を書き始めたのはオバマ大統領の時代だ。黒人の大統領が選ばれたことで『人種差別は終わった』と言われていたが、そんなのは嘘だ。この映画は表からは見えない奥深いところで煮えたぎっている差別意識を暴こうとした。だから悲惨な結末で世界にパンチを入れたかった。これが現実だから」

しかし『ゲット・アウト』の編集段階で、差別は表面に現れた。白人警官が丸腰の黒人を殺害する事件が全米各地で頻発し、しかも警官たちは起訴すらされなかった。さらに人種差別を公言するドナルド・トランプが大統領に選ばれた。当初の絶望的なエンディングは現実そのものになってしまったのだ、

「だから僕は結末を撮り直した。人々は映画の中くらい、救いとヒーローが必要だから」



今年6月、LAに滞在していた時期、ラジオで、服やスニーカーのショップで、カフェで、レストランで、「またか!」と思わず口に出してしまいたくなるほどチャイルディッシュ・ガンビーノの「Redbone」を頻繁に耳にした。同曲が収録されたチャイルディッシュ・ガンビーノのサード・アルバム『Awaken, My Love!』がリリースされたのはその半年以上前の2016年12月のこと。さすがに気になってきて、「どうして今になってこの曲がこんなに流行ってるの?」と現地の友人に訊いたら、「あぁ、『ゲット・アウト』の冒頭で使われて以来、ちょっとしたブームみたいになってるんだ」とのこと。自分はその時点でまだ『ゲット・アウト』を観ていなかったので、その場では「ふーん」と答えるしかなかったが、後日実際に本作を観て、それまで断片的に入っていた情報の点と点がすべて繋がった。

『ムーンライト』のオープニング・シーンで、ケンドリック・ラマーのアルバム『To Pimp A Butterfly』の冒頭でサンプリングされていたボリス・ガーディナー「Every Nigger is a Star」が使用されていたことに深い意味があったように、『ゲット・アウト』のオープニング・シーンでチャイルディッシュ・ガンビーノ「Redbone」が使用されているのにも意味がある。HipHopDX(アメリカのヒップホップ系有力ウェブメディア)でジョーダン・ピール監督が受けたインタビューの発言を引用しよう。

「『Redbone』の歌詞の"stay woke"(目覚めたままでいよう)というラインは、まさにこの作品のストーリーを予感させるものだし、作品のメッセージにもリンクしていた。『ゲット・アウト』で、僕はまず黒人観客の中でもコアな層を満足させたかったんだ。そのためには、主人公はスマートでインテリジェントで観察力の鋭い人物である必要があった。どんな状況であっても『目覚めている黒人』であると観客に信頼してもらえるようなね」

これまでアメリカ映画が描いてきた裕福な黒人といえば、高級車をころがすプッシャーやピンプの元締め、あるいはビジネス界やスポーツ界で成り上がった実社会におけるエリートといったステレオタイプばかり。しかし、『ゲット・アウト』のストーリーを起動させる上では、ファッション系のフォトグラファーというクールな自営業者で、その仕事で成功してニューヨークの洒落たアパートに住み、高級車よりもビンテージ家具にお金をつかうような洗練された新しい黒人男性像、いわば「目覚めている黒人」男性像を必要とした。日本の観客にはなかなか共有されにくいかもしれないが、ジョーダン・ピール監督の言う「黒人観客のコアな層」にとって、チャイルディッシュ・ガンビーノの音楽は、そんな主人公の文化的、社会的背景を一瞬で説明してしまう、ある種の象徴となっている。

チャイルディッシュ・ガンビーノは、俳優、コメディアン、監督、プロデューサーとしてアメリカのエンターテインメント界で八面六臂の活躍をしているドナルド・グローバーの音楽家としての別名。ドラマ『コミ・カレ!!』(2009~2012年)で俳優として人気に火がついた彼は、コミック版『スパイダーマン』の主人公マイルズ・モラレスのモデルになったとも言われていて、一時期、映画『スパイダーマン』シリーズでも「次期ピーター・パーカー役をドナルド・グローバーに」という運動がコミック・ファンのあいだで起こったほどのヒーロー的な存在(今年の『スパイダーマン:ホームカミング』への出演は、その運動を受けたものでもあった)。今年のエミー賞では製作・脚本・監督・主演作品『アトランタ』でコメディ部門の監督賞と主演男優賞をダブル受賞、2018年公開の『スター・ウォーズ』スピンオフでは若き日のランド・カルリジアン役に決定と、ますますその地位を確固たるものにしている。

本作『ゲット・アウト』の大ヒットには、もう一人、現在のアメリカ黒人社会におけるヒーローが貢献している。CDのリリースをしないどころか、ダウンロード販売さえしないまま、ストリーミングだけで今年のグラミー賞において最優秀新人賞を含む3部門を受賞したチャンス・ザ・ラッパーだ。

今年の2月26日、アメリカでの『ゲット・アウト』公開初日に、すぐに劇場



# REVIEW

## 『ゲット・アウト』の大ヒットに貢献した、新しいブラック・カルチャーを象徴する2人のヒーロー

**宇野維正**
（映画・音楽ジャーナリスト）

へ駆けつけたチャンス・ザ・ラッパーは「『ゲット・アウト』はインクレディブル！ ここ最近のあらゆるジャンルの作品の中でベスト！」と感想をツイート。それだけでも、500万人以上のフォロワーがいる「新しい時代のヒーロー」の影響力は絶大なわけだが、なんとそのツイートの約5時間後、「今日の（地元シカゴの）87番街Chatham Theatreの入場チケットをすべて買い上げたよ。IDさえ持ってれば誰でもタダで観られるようにしておいたから、みんな劇場で楽しんで！」とツイート。その後、SNS上では劇場に集まったファンからの写真やテキストの投稿が殺到した。

その一部始終をSNS上で追いながら、チャンス・ザ・ラッパーの行動力、スピード感、バズと多大な宣伝効果を生み出していく鮮やかな手法に、鳥肌が立つほど興奮させられた。なにしろ、彼自身はまったく製作に関わっていない作品にもかかわらず、そこまでやってしまうのだ。そして、まさにそういうところが、チャンス・ザ・ラッパーが「黒人社会の新しいヒーロー」と呼ばれる所以なのだ。

『ゲット・アウト』の主人公クリスは、そんなチャイルディッシュ・ガンビーノ=ドナルド・グローバーやチャンス・ザ・ラッパーの時代を象徴する、ジョーダン・ピール監督が言うところの「スマートでインテリジェントで観察力の鋭い」黒人男性、「目覚めている黒人」男性だ。チャンス・ザ・ラッパーが献身的にこの作品のために動いたのも、ようやく映画の中で、これまでのステレオタイプな黒人男性像ではなく、現実にたくさんいる魅力的な「目覚めている黒人」の主人公が登場したという感慨があったからだろう。そして、それはそのまま、本作で描かれている「黒人に嫉妬する白人たち」の狂気の引き金となっている。『ゲット・アウト』は、そんな目が眩むほど鮮やかで重層的な構造を持った、インクレディブルな作品である。



# GET OUT
# PRODUCTION NOTES

## アメリカのモンスター：『ゲット・アウト』が生まれるまで

多くの人はジョーダン・ピールの名前を聞くと、人気お笑いコンビ"キー&ピール"の一人であるとか、『キアヌ』(16・未)に主演した彼のことを思い浮かべるだろう。コメディ映画やコメディ番組での活躍もさることながら、ピールはアニメ作品の吹替やモノマネでも知られている。しかし、このコメディ界の人気者で、エミー賞の受賞歴を持つ彼が、コメディとは別のジャンルの長年のファンでもあったことはあまり知られていない。ピールの監督デビュー作は、ホラー映画の世界を切り拓いてきたとも言えるユニバーサル映画が配給し、同社のホラー映画作りのパートナーであるジェイソン・ブラムのブラムハウス・プロダクションズが製作する。

「マッドTV!」(95～09)に出演し、脚本も担当していたピールは、昔からのホラー映画ファンであり、恐怖と笑いのインスピレーションの源泉は同じだと信じていて、どちらも人間という不条理なものを知ろうとする私たちの欲求に基づくものだと考えている。笑うことや怖がる自分を受け入れることで、人は心を浄化して困難や不安を切り抜けるという事実を彼は理解している。笑いや恐怖という感情をコントロールできれば、人は前に進むことができるのだ。

この緊張と緩和は観客を満足させるものだとピールは言う。「一方では、観客は笑いたがっていて、もう一方では、怖がりたがっている。自分の大好きなジャンル、つまり"ホラー"に、コメディで学んだすべてを注ぎ込むのは楽しかったね」

これまでも現実の世界から不条理なものを汲み取ってきたピールは、映画の脚本に取り組み始めたとき、ホラーであると同時に、社会批評にもなるような作品にしようと考えていた。その結果として生まれた『ゲット・アウト』は、ユーモアと風刺と恐怖が織り交ぜられた刺激的なホラー作品となり、現在アメリカが直面している人種間の問題を恐れることなく、採り上げるものとなった。「そういう考えは、スリラーやホラーというジャンルに、私独自の声を与えることで貢献したいという思いから生まれたものだ」と彼は言う。「この映画には、人種問題や私が長年取り組んできたもの、つまりコメディの要素が含まれている。これは、私の本当の恐怖やこれまでに経験してきた問題が反映された映画なんだ」

ピールが作り上げた主人公クリスは、ニューヨークに暮らすアフリカ系アメリカ人の写真家で、白人の彼女ローズと付き合い、ある長い週末に彼女の両親のもとを二人で訪ねて、関係をもう一歩先へ進めようとしている。彼女の郊外の実家に着くなり、クリスは何やら不穏なものを感じ始める。その郊外で複数の黒人男性が失踪していることを知ると、クリスの不安は根も葉もない妄想ではないことが明らかになっていく。いつもと変わらぬ平凡な週末が、狂気に満ち、恐ろしく、スリリングで、おぞましいと同時に、楽しくもあるものへと変わっていく。

ピールは観客の予想を裏切っていくことを楽しんでいると認めている。「『ゲット・アウト』の大前提は白人女性が黒人男性を実家に連れていくということだが、彼女はそのことが持つ社会的意味を深く考えていない」とピールは言う。「彼女は自分の家族なら、彼を連れていっても問題ないだろうと思っている。実際に問題ないように見えるが、観客はおぞましい何かが起こりつつあることを感じ始める」

何やら不穏な出来事が重なるにつれ、クリスの疑念は徐々に募っていく。アーミテージ家の面々の奇妙な行動を観察して、クリスは正常ではないのは、自分ではなく相手の方だと悟る。「ポイントは、常軌を逸した出来事を急いで起こさず、登場人物だってこんな状況なら逃げ出すだろうと観客に思わせないようにすることだった」とピールは語る。クリスが違和感を抱いてしまうような要素は解決するが、一家はどこかズレているとも感じるようになる。「彼らはこれまでに会ったどんな人間とも違うんだ」

さらに、今回のホラー作品の主人公にとって何よりも大事なのは、観ている人間が不自然に感じる行動はとらないでおくことだったとピールは言う。「時に電話を手に取って警察を呼んで、その家から逃げ出せばいいじゃないかって思ってしまうことがあるよね。だから、クリスには電話を使って連絡を取らせた。つまり、現実的で、頭を働かせる、論理的な人間にした。その方が説得力がある」

ベトナム戦争の時代を浮き彫りにしたジョージ・A・ロメロの『ナイト・オブ・ザ・リビング・デッド／ゾンビの誕生』(68・未)から、人間の本質的な暴力性を描いたウェス・クレイヴンの『鮮血の美学』(72)に至る、最も挑発的な部類のホラー映画と同様に、『ゲット・アウト』も単なるエンターテインメントを超えて観客を揺さぶる。ピールは語る。「これはアメリカの人種への向き合い方についての映画で、人種差別というものを悪霊として、アメリカのモンスターとして考える映画だ。そして、無関心という概念や、無関心であり続けたら、人間は残虐な行為が起こっていても傍観してしまうということについての映画でもある」。彼はホラーというジャンルを掘り下げて、人種問題を巡る恐怖について意見を交わすことが大事だと感じていた。「そういう対話は重要な要素だね」

監督デビュー作として、才能豊かなピールは陽気なコメディを撮ると思っていた人も多いだろうが、彼はホラー映画である『ゲット・アウト』を自身の一本目にしたいと考えていた。「監督兼脚本は、どちらか片方だけをするよりは簡単だ。両方やる利点は、それぞれ別の時期に取り組むから、やりながら気を使わなくてすむことだ。現場で何かを変更するときに自信を持って、脚本の意図を見失っていないと確信できるのは大きなメリットなんだ」

『バッドガイ 反抗期の中年男』(14・未)を監督したジェイソン・ベイトマンを筆頭に、数々の役者たちを監督デビューへと導いてきたベテラン・プロデューサーのショーン・マッキトリックとエドワード・

H・ハム・Jr.、そしてピールは、自身の脚本を映像化するにあたり、『パラノーマル・アクティビティ』(07)を大ヒットさせてホラーというジャンルを再開拓した鬼才ジェイソン・ブラムと手を組んだ。ブラムが手掛けた最新作『スプリット』(17)はM・ナイト・シャマランが監督・脚本・製作を務め、全米興行収入3週連続第一位を獲得した。ブラムがユニバーサル映画と契約を結んでいることも、本作が生まれる足掛かりとなった。

ブラムはピールとの仕事に取り組むことになった要因について振り返っている。「ジョーダンはものすごく才能があると同時に、協力的でもあるという稀に見る人物なんだ。私はあらゆるホラー映画を観て、あらゆるホラー脚本を読んでいるが、こんな映画は観たことがなかった。ジョーダンがホラーを撮ることについて言えば、コメディとホラーの間にはかなり似た要素があると思っている。どちらのジャンルも観客が劇場で身体的に反応する。ジョークを出すタイミングと怖がらせるタイミング、そして映画の中にジョークや恐怖を組み込む方法は、すごく似ているんだ。その笑いと恐怖の組み合わせ、そして『ゲット・アウト』について熱心に語るジョーダンを見て、私は自信を持って製作を進めることにした」

マッキトリックは共通の友人を介してピールと出会った。「ジョーダンを紹介してくれたキーガン=マイケル・キー(ピールの相棒)に感謝しているよ。彼は本当にホラー映画が好きなんだ。『ゲット・アウト』のアイデアは今までに聞いたことのないようなものだった。『ステップフォード・ワイフ』(75・未)であれ、『ローズマリーの赤ちゃん』(68)であれ、優れたホラー映画というものは私たちの社会の核心を突く批評性を備えている。私はすぐに答えたよ。"その映画は是非作らなくてはいけない"とね」

カルト的人気を誇る『ドニー・ダーコ』(01)を手掛けてプロデューサーとしてのキャリアを歩み始めたマッキトリックは、ピールの監督としての才能にも舌を巻いた。「今までで最高の経験の一つだ。ジョーダンはものすごく熱心だし、自分のするべきことをはっきりと心得ている。コメディとホラーはすごく近い関係にあるから、彼は本作を撮る前から既に専門家だったんだ。彼は人生を通してホラーを勉強してきたとも言える」

ブラムは単線的ではなく、重層的な意味を持つ映画を好んでいる。「『ゲット・アウト』には偉大なホラー映画のスリルと恐怖があるが、それだけじゃない」と彼は言う。「怖くてスリルとアクションがあるだけではなく、社会批評も含んだ『パージ』シリーズ(13、14、16)のことを思い出した。『ゲット・アウト』にも同じことが言えて、偉大なジャンル映画に求めるすべてが表現されていると同時に、私たちの世界についても多くを語っている。ジョーダンは見事な方法を考え出し、人種に光を当て、語っている。しかも、それをかなり高いレベルで行なっている。観客は自分たちが知っているような展開が繰り広げられるだろうと思い込まされ、物語は恐怖とは程遠いものに感じられるが、実際は予想とは正反対の事態に陥っていくんだ」

## 選ばれし者たち:『ゲット・アウト』のキャスティング

『ゲット・アウト』の中心となる"文化の衝突"を表現するべく、ピールは幅広く役者を探した。高い評価を得ている役者からデビューして間もない若手まで、様々な役者を起用した。

ピールにとっては、パフォーマーとしての長年の経験は役者たちへの演技指導に大きく役立ったようだ。「ジョーダンはカメラの前で演じる経験を何年も重ねていたおかげで、役者というものを理解していた」とマッキトリックは言う。「役者たちに伸び伸びと演じさせることができていた。自分で脚本も書いているから、各キャラクターを完璧に把握して理解している。役者たちは自分の役に違った視点を持ち込んで、ジョーダンはそれを発展させて役に加えたりもした」

本作の主人公クリスは写真家志望のアーティストで、ローズと恋愛関係にある。この主人公には複雑な過去があるとピールは言う。「クリスは高い知性を持つ男で、感情的なトラウマを抱え、芸術を通して自身の痛みを表現しようとしている」

ピールとしては、クリスの抱く混乱、特に想定していた白人の家庭の反応と実際の反応の齟齬から生じる混乱を表現する役者を見つけることが重要だった。「クリスを最もうろたえさせるのが、ローズが家族に対して恋人は黒人だと一切知らせていなかったという事実だ。彼は気まずい状況を想定している。クリスは人種問題に自覚的に"目覚めている人"だと言えるね。恋はしているけど、この状況に目をしっかりと開いて向き合っている」

クリス役には、アーミテージ家にとっては好感の持てる新参者であると同時に、れっきとした部外者でもあるという微妙な境界を演じられる俳優を起用する必要があった。製作チームはイギリス俳優ダニエル・カルーヤを主人公に据えた。「ダニエルは紛れもないスターだ」とピールは讃える。「彼は観る者を惹きつけるし、シーンに入り込む優れた力を持っている。「ブラック・ミラー」(11〜)、『ボーダーライン』(15)の頃から好きだったんだ。この映画は彼が引っ張っている」

クリスは疑念を振り払って週末を楽しもうとするが、アーミテージ家に対する自身の直感を信用した方がいいのではないかと感じ始める。特にローズの母親の精神科医ミッシーは、娘の新しい彼氏は自分が独自に開発したセラピーを受けなくてはいけないと主張してくる。クリスはいずれタバコを止めようと考えているが、焦っていない。それにも拘らず、ミッシーはタバコを止めさせようとしてくる。「クリスはミッシーが極端な人物だと感じる」とカルーヤは言う。「そして、彼女は労せず自分の欲しいものを手に入れようとする高慢な女性だと思うようになる。夜中にふと気づくと、クリスはミッシーの部屋で催眠術をかけられている」

ローズが新しい彼氏を実家に連れて来る日として、その週末を選んだのは、死んだ祖父と祖母を讃える年に1度のガーデン・パーティが行なわれる週末だからだった。この故人を讃える親戚や友人たちの集まりは、最初はクリスにも心温まる会に感じられる。彼は若い頃に母親を亡くしていて、長い間、自力で生活することを強いられていたのだった。カルーヤは語る。「この映画の大部分は、何が起きるだろうかと予想していくことになる。クリスはパーティで"何かがおかしい"と気づき、苛烈な人種差別が隠されていることを感じ取る。あるやり取りの後、周りは自分の味方ではないとす



ぐに察知し、彼は実家を去ることを考える。ここに自分は合わないと感じ、何か胸騒ぎがしている」

ローズというキャラクターの中に、ピールは主人公の完璧な彼女という要素を描き込んでいる。実際、アーミテージ家の振る舞いにクリスが戸惑うのと同じくらい、ローズは家族の振る舞いに心を痛める。「この映画にとっては、核の部分ではラブストーリーであることがすごく重要だった」とピールは言う。「応援したくなるような二人だ。彼女は完璧ではない。彼女は映画が進むにつれ、初めて異人種間の交際に伴う困難を自覚するようになるが、クリスの境遇を理解しようと努めている。彼女はすごく協力的で、思いやりのある、明るくて賢い人物なんだ」

若き看護師ローズ役として、製作チームは「GIRLS／ガールズ」(12～)やミュージカルなどでの演技が目を引いたアリソン・ウィリアムズを抜擢した。それはブラムにとっては、仲の良い友人と仕事をする機会となった。「アリソンは昔からの友人なんだ」とブラムは言う。「だから、遂に彼女と仕事ができるなんて、本当に素晴らしい機会だったよ。彼女は最高の仕事をやってくれたね」

「アリソンはこの映画の核である、慰めと愛をもたらしている」とピールは言う。「彼女のおかげで、二人の関係を応援したくなる。ローズは親しみやすく、とてもリベラルで愛情深い」とマッキトリックは言う。「彼女は黒人の彼氏のことを両親がどう思うか不安に感じているが、怪しげなアーミテージ家に加担しているようには一切思えない。彼女は常にクリスの味方で、彼のことを本当に愛しているように見える」

アリソン・ウィリアムズは、この真の意図を胸の奥に秘めた若い女性を演じた。ウィリアムズはこう語る。「ローズは黒人の彼氏を白人の家族に会わせるため、実家へ連れていく。二人が到着すると、“何かがおかしい”。ローズは家族への忠誠と新しい恋人への忠誠の間で引き裂かれているけど、クリスに肩入れしている。彼女は二人の関係を守るためなら、家族との衝突も辞さない気持ちでいる」

ウィリアムズはピールが単なるホラーに留まらない物語を作ったことを讃えて、彼と仕事をすることに対する役者たちの気持ちを次のようにまとめた。「監督が脚本家でもあるというのは幸せなことね。ビジョンや思考や意図に一貫性があるもの」

『ゲット・アウト』の多くのシーンを占めるのは、カルーヤとウィリアムズの若い二人で、彼らの力や化学反応を製作チームは見逃さなかった。二人についてマッキトリックは言う。「アリソンはこの映画に参加が決まった最初の人物で、ダニエルは長い時間をかけて出演が決まった。二人は映画を支える重要な存在だ。アリソンは偉大な女優で、スクリーンの中でも外でも素晴らしい人間だ。ダニエルは類い稀なる俳優で、全身を使って表現ができる。彼のような演技は他に見たことない。それ程の力で演じるから、テイクを重ねる度に文字通り疲れ切ってしまうんだ。彼の迫真の演技は映画を支えているね。クリスを普通の人間として演じることで、観客は感情移入ができるようになっている」

引退した神経外科医ディーンと精神科医ミッシーというローズの両親役には、コメディ界を牽引してきた二人の役者を起用した。「ザ・ホワイトハウス」(99～06)、『キャビン』(11)、「トランスペアレント」(14～)などに出演し、ゴールデングローブ賞にも3度ノミネートされたブラッドリー・ウィットフォードと、『マルコヴィッチの穴』(99)、『40歳の童貞男』(05)、『キャプテン・フィリップス』(13)などに出演し、2度のアカデミー賞®ノミネート経験を持つキャサリン・キーナーが、典型的な悪役とは一味違う両親を演じている。

アーミテージ家の両親二人は、ピールが脚本を通して批判しているリベラルなエリート層を体現する存在だとブラムは考えている。ローズは彼らにクリスが黒人であることを伝えていなかったが、

彼女は恋人の人種が違っても両親は問題にしないだろうと思っている。しかし、クリスが直面するのは、そんな予想とはまったく異なる反応だ。「両親はほとんど人種差別に近い発言をし始める。彼らは周囲を困惑させる」とブラムは言う。「彼らはクリスにゴルフは好きかと訊ね、タイガー・ウッズの大ファンなのだと言う。彼らはリベラルな白人エリート、つまり人種に関して極めて敏感な人間として描かれている。実際は敏感というより鈍感なんだけどね」

アリソン・ウィリアムズと同様に、ウィットフォードも本作への参加を喜んでいた。「ジョーダンのことは大ファンで、彼の庭掃除だって喜んでするくらいだよ」とウィットフォードは笑う。この映画の衝撃についてはこう語る。「観客は他にない反応を示すだろうね。この映画はホラーというジャンルの概念を覆すようなものなんだ」

ピールは彼らの役や演技についても語っている。「ブラッドリーはディーン役を演じている。こちらの警戒心がなくなる程に親切で、どこか間の抜けた父親だ。しかし、この父親には、目に映る以上の何かがあることが明らかになっていく。キャサリンも、クリスに催眠術をかけてひどく居心地の悪い経験をさせるミッシー役を見事に演じている。彼女は完璧な義母のように見えるが、映画が進むにつれ、観客は"何か恐ろしいことが起こっているぞ"と気づくことになる」

『X-MEN：ファースト・ジェネレーション』(11)のバンシー役で人気を博したケイレブ・ランドリー・ジョーンズが、知り合うにつれ、クリスに突っ掛かってくる、ローズの弟ジェレミー役を演じている。ジョーンズはジェレミーというキャラクターに言葉にならない不気味さを与えていて、クリスは出会った瞬間からその不気味さに困惑している。ピールはジョーンズを次のように賞賛する。「ケイレブはあらゆる怖さを体現すると同時に、すごく面白くてどうしても目が離せないんだ。ある意味で、映画のトーンを決める中心的な存在とも言える」

アーミテージ家に仕える管理人ウォルターと家政婦ジョージナというアーミテージ家の使用人役を演じるのは、『ジャンゴ 繋がれざる者』(12)、『ピートと秘密の友達』(16)などに出演したマーカス・ヘンダーソンと、「グッド・ガールズ！～NY女子のキャリア革命～」(15～)、『パージ：大統領令』(16)などに出演したベッティ・ガブリエル。初めてこの二人と出会うとき、クリスはアフリカ系アメリカ人に対する、この郊外のコミュニティの奇妙な兆候を目の当たりにすることになる。夜中の庭で死んだような目をして駆け寄って来るウォルターも、ぼんやりと鏡を見つめるジョージナも、どちらも普通の人間のようには見えない。クリスはローズの実家で黒人と出会う度に、想定とは逆の反応を受け取る。クリスにとっても観客にとっても、どこか居心地の悪い状況だ。それはピールが意図したことだった。「この家にはいわゆる昔ながらのアフリカ系アメリカ人の使用人がいて、クリスは家族の一員として迎えられようとしている。クリスはウォルターとジョージナにアフリカ系アメリカ人としての連帯感を持とうとするが、彼らからそうした仲間意識を得ることはできず、孤独感や疎外感を抱く」

アーミテージ家にとっては当たり前の環境も、クリスにとっては大きな違和感がある。「クリスにとってはすごく異様なんだ」とカルーヤは言う。「ローズの一家は白人なのに、彼らに仕える使用人は黒人だ。それが少し異様に映るんだ、世界でも有数の先進的な文化を持つニューヨークから来たクリスにとってはね」

クリスはよく自分を見つめてくるジョージナに出会うが、彼女はクリスではなく、鏡に映った自分自身を見つめているようである。

「ジョージナは自分を愛している」とガブリエルは言う。「彼女は自分の見た目を気に入っていて、ことあるごとに自分の姿を眺めているの」

ジョージナはアーミテージ家の年に1度のパーティで本性を現わし始める。「その集いはローズの祖父母を讃えて、彼らを忘れないでおくための家族の伝統なの。その会にクリスは衝撃を受け、周りは全員が彼の参加に関心を抱いている、ちょっと過剰なまでにね」

クリスはジョージナと同様に、管理人ウォルターもアーミテージ家の秘密を語ってくれないと感じている。「ウォルターはアーミテージ家の管理人で、一家にすごく従順だ」とヘンダーソンは言う。「彼にはどこかズレたところがあって、別の世界から来たようなものの見方をしている」。ヘンダーソンはすべてが明らかになるまでは謎に包まれ続ける物語を賞賛した。「私が演じるキャラクターは大きな秘密を隠している。ピールから渡されたメモにはこう書いてあった。"あなたはこんな秘密を持っていて、本当は言いたいのに、それを言うことはできない"。それで自分の子供心に火がついたよ。演じるのが楽しくなったね」

主に白人たちが集まるその週末にクリスが出会うアフリカ系アメリカ人は、ウォルターとジョージナだけではない。喋り方や行動だけではなく、古風な服装も印象的な黒人の若者ローガン役を演じるのは、『ストレイト・アウタ・コンプトン』(15)でスヌープ・ドッグ役を演じたレイキース・スタンフィールド。クリス以外では唯一の黒人招待客であるローガンは、年上で白人の妻と一緒でどこか上の空だ。「ローガンはローズの家族のことをよく知っている」とスタンフィールドは言う。「彼らと何年も付き合いがあり、パーティで彼らと共に祝うことを喜んでいる」

クリスが持つ携帯のフラッシュが光ると、ローガンは発作を起こしたかのようなはっきりとした意識でクリスを掴んで、この家から出て行けと声を上げる。「彼は映画の中で恐ろしく豹変する瞬間がある」とスタンフィールドは言う。「そして、豹変している間、彼は周りが想定する彼とはまったく異なる文化的表現をするんだ」

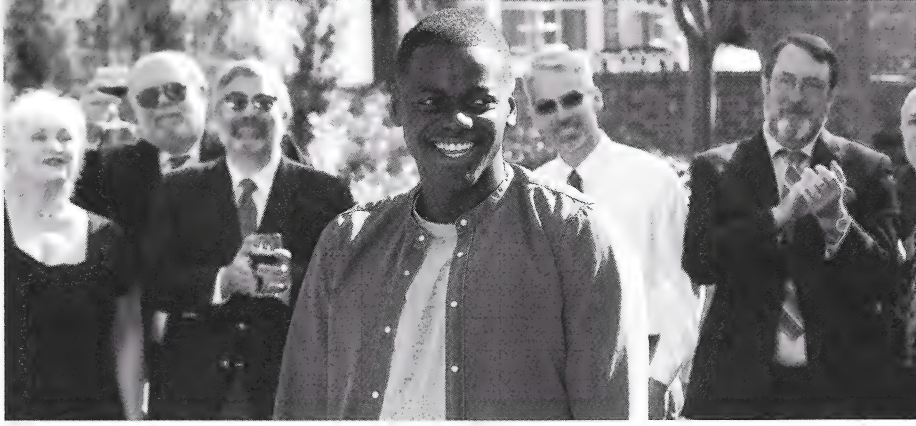
マッキトリックはその一瞬の豹変について、こう語っている。「ローガンの写真を撮ったときに光ったクリスの携帯のフラッシュは、ローガンの中の何かを刺激し、彼はクリスを攻撃するようになる。ローガンは鼻血を流し始め、事態は何やら深刻なのだとわかる。精神科医ミッシーがローガンをあるべき姿へと戻していく」

ピールは重要な脇役を演じた役者たちにも大きな誇りを抱いている。ピールは彼らを次のように讃えた。「マーカスもウォルター役を見事に演じてくれたし、ベッティはジョージナ役として素晴らしい演技を見せてくれた。レイキースは独特な役で、驚く程の演技の幅を見せてくれたし、この役に身を捧げてくれた」

この年に1度のパーティの奇妙な客ジム役を演じるのは、『ドッジボール』(04)などのコメディ映画だけではなく、「ボードウォーク・エンパイア 欲望の街」(10～14)、『トランボ ハリウッドに最も嫌われた男』(15)などのシリアスな作品、そして見事な吹替の仕事で知られている個性派俳優スティーヴン・ルート。「私が演じるキャラクターは盲目だ。関わり合いを持ちたくないような雰囲気の人物かもしれないが、ニューヨークから来た裕福な人間であるかもしれない」とルートは言う。

『ゲット・アウト』の秘密が映画の途中でバレてしまわないようにすることは、役者たちにとってもプロデューサーやピールにとっても重要なことだった。ルートは秘密を隠すという任務について、遠慮がちにこう語る。「クリスは顔立ちの良い若者で、パーティにいる誰もが彼に会いたがる、理由はそれぞれ同じじゃないにしてもね。パーティや招待客を含めて、表向き通りのものなんて一つもないんだ。本当は何が起きているか、観客はしばらく見当もつかないはずだよ」

この映画の"正義の味方"となる、面倒くさがりの運輸保安局職員でクリスの親友ロッド役を演じるのは、「ザ・カーマイケル・ショー」(15～)に出演するリルレル・ハウリー。彼は観客の声を代表している。「ロッドは、"出て行け！ その家から出て行け。振り返るな。そのクローゼットには戻るな"なんていうホラー映画の観客の声が与えられたキャラクターなんだ。彼のもとには、ローズの実家にいるクリスから何度か電話がかかってくる。そして、ロッドは事態の一部を把握し始め、何か良くないことが起こりつつあることを悟る。彼は私たちの理性の声であると同時に、緊張を緩和する存在でもある」



## 不穏な空気：『ゲット・アウト』の製作

映画の撮影はアラバマ州モービルで行なわれた。撮影は雨の合間の晴れた時間に、エキストラが濡れないように注意しながら行なわれ、自分たちの担当だけではなく、力を合わせて映画を作り上げようという雰囲気に満ちていた。

夜中のアーミテージ家の暗い一角での撮影など、数々の難題に直面したチームだったが、何よりも大変だったのはローガンがクリスを責める庭でのパーティのシーンだろう。ウィットフォードはそのシーンを次のように語っている。「その集いで行なわれるオークションは重要な慈善事業なんだ。世の中には病気や困難に対する様々なチャリティがあるけど、ここで彼らが支援しているのはそれを超える何かだ」

衣装デザインのナディン・ヘイダーズはパーティの客たちに、ニューヨーク郊外の上流階級のエリートたちに見合うオーダーメイドの衣装を用意した。プロダクション・デザインのラスティ・スミスはパーティの奇妙な主催者たちに馴染むことができない一人の客を除いて、全員が寛げるセットをデザインした。撮影監督のトビー・オリヴァーが撮るショットは、どれもクリスの感情をよりよく伝えることが意図されていた。誰もがクリスに対して上品に優しく接しているものの、フレームのすぐ外には恐怖が潜んでいる。クリスが視線を外しているとき、彼を凝視するパーティの客たちのアップが映し出されもする。

「それはこの映画を象徴するようなシーンだ」とピールは言う。「恐ろしいシーンであると同時に、どこか笑える。パーティで唯一の黒人であるというクリスの孤独感は顔中に表われている。クリスとローズに語りかけてくる誰もが、アフリカ系アメリカ人の文化への繋がりを持ち出してくる」

このシーンは多くの役者の心に残ったシーンでもあった。「こうしたことは現実の生活でもよく起きる」とピールは言う。「クリスはどうしても黒人男性の象徴として扱われてしまう。このシーンは、より深い恐怖を示している。ある時点で、クリスはパーティにいるローガンを目にする。自分以外にアフリカ系アメリカ人の男性がいてホッとするが、クリスが話しかけると、ローガンはクリスのような経験をしていないことがわかる。彼は『ステップフォード・ワイフ』のような状況で、クリスよりも疎外感を抱いていることが明らかになるんだ」

製作を終えたチームの面々は、『ゲット・アウト』の成功を祈っている。「何よりもまず、観客には楽しいアトラクションに乗ったような気分を味わってもらいたい」とマッキトリックは言う。「その後で、この映画に込められた社会批評について語り合ってもらえればと思う。私たちの中には、生まれや育った場所や育てられた人によって形成されていった、気づかない偏見があるのだということについてもね」

ブラムは『ゲット・アウト』がジャンルをミックスさせた映画の成功例であり、自身の好きなタイプの映画だと考えている。「これは恐ろしい映画だけど、怖いコメディ映画ではない。ホラー映画の中にコメディの要素を取り込むことが重要なんだ」と彼は言う。「観客に笑う機会を与えることで、恐怖がより機能する。笑いは観客の警戒心を解くもので、その後で怖がらせれば、観客はより一層恐怖を抱く」

こうして作品世界を作り上げてきたピールは、観客が様々なレベルで本作を楽しむことを願っている。彼は言う。「何よりも第一に人を楽しませたいと思っているから、劇場で楽しんでくれることを願っている。この映画には色々なものが詰まっている。楽しいし、恐ろしいし、刺激的だし、観る人には笑ってほしいとも思う。その後で、人種やホラー映画についての議論が交わされることを願っている」

# FILMMAKERS

## 製作：ショーン・マッキトリック
**Produced by**
**SEAN McKITTRICK**

24歳のとき『ドニー・ダーコ』(01)に企画・製作で携わり、2007年にエドワード・H・ハム・Jr.と共にダーコ・エンターテインメントを設立、『JIMI：栄光への軌跡』(13)、『バッドガイ 反抗期の中年男』(14・未)などを手掛ける。2016年にはハム、レイモンド・マンスフィールド、ショーン・レディックと共にQCエンターテインメントを立ち上げ、『高慢と偏見とゾンビ』(16)を製作。

## 製作：ジェイソン・ブラム
**Produced by**
**JASON BLUM**

1969年、カリフォルニア州ロサンゼルス生まれ。ヴァッサー大学でノア・バームバックとルームメイトになり、彼の監督デビュー作『彼女と僕のいた場所』(95・未)で製作デビュー。ブラムハウス・プロダクションズを設立し、わずか1万5千ドルで製作した『パラノーマル・アクティビティ』(07)が全世界2億ドルの興行収入を叩き出した。『パラノーマル・アクティビティ』シリーズ(07、10、11、12、14、15・未)、『インシディアス』シリーズ(10、13、15)、『パージ』シリーズ(13、14、16)などのホラーを手掛けている。他に『セッション』(14)、M・ナイト・シャマラン監督の『ヴィジット』(15)、『スプリット』(17)も大ヒットさせた。

## 製作：エドワード・H・ハム・Jr.
**Produced by**
**EDWARD H. HAMM, JR.**

2007年にショーン・マッキトリックとダーコ・エンターテインメントを設立。2016年にはマッキトリック、レイモンド・マンスフィールド、ショーン・レディックとQCエンターテインメントを立ち上げた。様々なプロジェクトに加えて、複数の企業で役員も務めている。

## 製作総指揮：レイモンド・マンスフィールド
**Executive Producer**
**RAYMOND MANSFIELD**

ザ・コレクティヴで映画の財務・営業部門を統括し、名立たるインディーズ映画の製作・資金調達・営業・配給に携わった後、2009年にショーン・レディックと共にムービー・パッケージ・カンパニーを設立。2016年にはレディック、ショーン・マッキトリック、エドワード・H・ハム・Jr.とQCエンターテインメントを立ち上げ、『高慢と偏見とゾンビ』(16)を手掛けた。

## 製作総指揮：クーパー・サミュエルソン
**Executive Producer**
**COUPER SAMUELSON**

2929エンターテインメントで『アンダーカヴァー』(07)、『トゥー・ラバーズ』(08・未)などを共同製作。ブラムハウス・プロダクションズで長編映画部門を統括し、『セッション』(14)、『アンフレンデッド』(15)、『ザ・ギフト』(15)などを手掛けた。

## 製作総指揮：ショーン・レディック
**Executive Producer**
**SHAUN REDICK**

アメリカの大手タレント・エージェンシーに身を置き、10年以上にわたって第一線の映画人・配給会社との関係を築いた。2009年にレイモンド・マンスフィールドと共にムービー・パッケージ・カンパニーを設立し、『トレジャーハンター・クミコ』(14・未)を製作、2016年にはマンスフィールド、ショーン・マッキトリック、エドワード・H・ハム・Jr.と共にQCエンターテインメントを立ち上げ、『高慢と偏見とゾンビ』(16)を手掛けた。

## 製作総指揮：ジャネット・ヴォルトゥルノ
**Executive Producer**
**JEANETTE VOLTURNO**

キャッチライト・フィルムズを運営して、数々の映画に携わった後、ブラムハウス・プロダクションズで製作部門を統括し、『パラノーマル・アクティビティ』シリーズ(07、10、11、12、14、15・未)、『インシディアス』シリーズ(10、13、15)、『パージ』シリーズ(13、14、16)などを手掛けた他、数々のテレビ番組も担当している。

## 撮影監督：トビー・オリヴァー
**Director of Photography**
**TOBY OLIVER**

出身地のオーストラリアやアメリカだけでなく、世界各地で活躍。『THE SILENT WAR 戦場の絆』(10・未)、テレビ映画「Beaconsfield(原題)」(12)で2010年及び2012年オーストラリア撮影監督協会賞などを受賞。ブラムハウス・プロダクションズ作品では『ダークネス』(16・未)を手掛けている。

## プロダクション・デザイン：ラスティ・スミス
**Production Designer**
**RUSTY SMITH**

『オースティン・パワーズ：デラックス』(99)、『ミート・ザ・ペアレンツ』(00)などのコメディ作品で活躍し、テレビ映画『61*(シックスティワン)』(01)で2001年プライムタイム・エミー賞にノミネート。テレビドラマ「ティーン・ウルフ」(11～)、「スクリーム」(15～)なども手掛けている。

## 編集：グレゴリー・プロトキン
**Edited by**
**GREGORY PLOTKIN**

『インサイダー』(99)、『ペイ・フォワード 可能の王国』(00)などの編集アシスタントでキャリアをスタート。『パラノーマル・アクティビティ 2』(10)、『パラノーマル・アクティビティ 3』(11)、『パラノーマル・アクティビティ 4』(12)、『パラノーマル・アクティビティ／呪いの印』(14)などを手掛けた他、『パラノーマル・アクティビティ 5』(15・未)では監督デビューしている。

## 衣装デザイン：ナディン・ヘイダーズ
**Costume Designer**
**NADINE HADERS**

「John from Cincinnati(原題)」(07)、「レバレッジ ～詐欺師たちの流儀」(08～12)、「シングルパパの育児奮闘記」(10～14)、「Legends(原題)」(14～15)、「バッドランド ～最強の戦士～」(15～)、「MACGYVER／マクガイバー」(16～)などのテレビドラマを主に手掛けている。

## 音楽：マイケル・アーベルス
**Music by**
**MICHAEL ABELS**

「グローバル・ウォーミング」、「ディライツ&ダンス」などの交響曲や合唱音楽で知られる。国立芸術基金、ロサンゼルス・オペラ管弦楽団などの多くのオーケストラから作曲の依頼を受け、ジェームズ・アール・ジョーンズ、ドック・セバーリンセンなどの多くのアーティストとコンサートで共演。本作が映画デビュー作。




脚本・監督・製作：ジョーダン・ピール

Written, Directed and Produced by

# JORDAN PEELE

1979年、ニューヨーク州ニューヨーク生まれ。コメディアンとして頭角を現し、コメディ番組「マッドTV!」(95～09)で5シーズン連続でレギュラーを務め、番組内で製作した音楽ビデオ"Sad 50 Cent"で2008年プライムタイム・エミー賞にノミネート。相棒のキーガン=マイケル・キーとコンビを組んだコメディ番組「Key and Peele（原題）」(12～15)で人気が爆発し、2014年ピーボディ賞及び2014年アメリカン・コメディ・アワードなどを受賞。最近ではキアヌ・リーヴスが猫の声で出演した『キアヌ』(16・未)にキーと共に出演、製作・脚本も手掛けた。本作が監督デビュー作となる。

# CAST



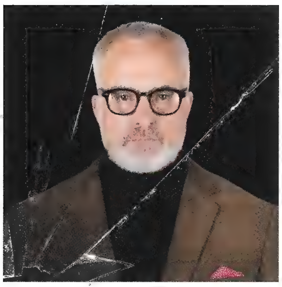
クリス・ワシントン：ダニエル・カルーヤ
Chris Washington : DANIEL KALUUYA

1989年、イギリス・ロンドン生まれ。テレビドラマや舞台で頭角を現し、脚本も手掛けた「スキンズ」(07～13)でポッシュ・ケネス役を演じて人気を博した。映画には『ジョニー・イングリッシュ 気休めの報酬』(11)、『ビトレイヤー』(13)、『キック・アス／ジャスティス・フォーエバー』(13)、『ボーダーライン』(15)などがある。本作で飛躍的に知名度を上げ、次回作はマーベル・スタジオの『Black Panther (原題)』(18)で、今後はハリウッドでの活躍も期待されている。



ローズ・アーミテージ：アリソン・ウィリアムズ
Rose Armitage : ALLISON WILLIAMS

1988年、コネチカット州ニューケイナン生まれ。わずか4歳で女優になると宣言し、イェール大学に在籍しながら即興演劇コメディ・グループ"Just Add Water"のメンバーとして活動。「MAD MEN マッドメン」(07～15)のテーマ曲に歌詞を付けた歌ネタ動画"Mad Men Theme Song...With a Twist"で注目を集め、ジャド・アパトーからオーディションに呼ばれ、「GIRLS／ガールズ」(12～)でマーニー役に抜擢される。ミュージカル特番「Peter Pan Live! (原題)」(14)ではピーター・パン役を演じて高い評価を得た。スキンケア・ブランド"シンプル"、スニーカー・ブランド"ケッズ"のモデルとしても活躍している。



ディーン・アーミテージ：ブラッドリー・ウィットフォード
Dean Armitage : BRADLEY WHITFORD

1959年、ウィスコンシン州マディソン生まれ。ウェズリアン大学で演劇や英文学を学び、ジュリアード音学院の演劇科に通った。舞台俳優として活動しながら長年にわたり映画やテレビドラマの名脇役として活躍。「ザ・ホワイトハウス」(99～06)でジョシュ・ライマン役を演じて人気を博し、2001年プライムタイム・エミー賞を受賞。次回作はジュディ・グリアの監督デビュー作『A Happening of Monumental Proportions (原題)』(17)、ブリー・ラーソンの長編監督デビュー作『Unicorn Store (原題)』(17)、グレッグ・キニアの監督デビュー作『The Philosophy of Phil (原題)』(17)などがある。



ジェレミー・アーミテージ：ケイレブ・ランドリー・ジョーンズ
Jeremy Armitage : CALEB LANDRY JONES

1989年、テキサス州ガーランド生まれ。17歳の時に『ノーカントリー』(07)で俳優デビュー。『ラスト・エクソシズム』(10)で注目を浴び、『X-MEN：ファースト・ジェネレーション』(11)でバンシー役に抜擢される。『アンチヴァイラル』(12)では映画サイトIndie Wireで"2012年最も優れた演技の一つ"に選出された。近作に『バリー・シール／アメリカをはめた男』(17)、トロント国際映画祭観客賞受賞の『Three Billboards Outside Ebbing, Missouri (原題)』(17)などがある。



ミッシー・アーミテージ：キャサリン・キーナー
Missy Armitage : CATHERINE KEENER

1959年、フロリダ州マイアミ生まれ。『きのうの夜は…』(86)で女優デビュー。初期は主にインディペンデント映画で活躍し、『マルコヴィッチの穴』(99)で1999年アカデミー賞®にノミネート。『40歳の童貞男』(05)でトリシュ役を演じて大ブレイクし、『カポーティ』(05)でネル・ハーパー・リー役を演じて再び2005年アカデミー賞®にノミネート。次回作は『November Criminals (原題)』(17)、『Soldado (原題)』(18)など。『Friend of Bill (原題)』で監督デビューを予定している。



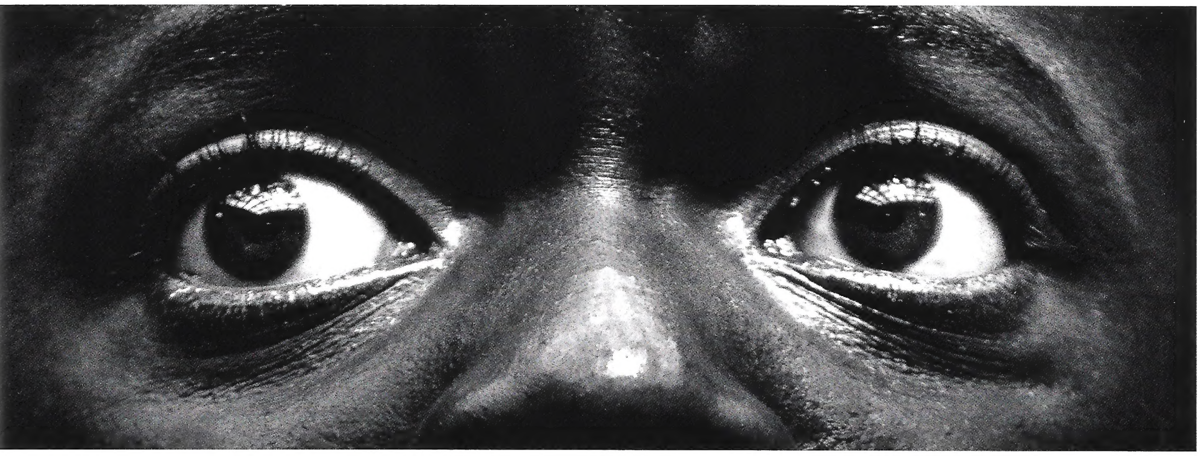


## FILMMAKERS

| | | | |
|---|---|---|---|
| Written and Directed by | JORDAN PEELE | 監督・脚本 | ジョーダン・ピール |
| Produced by | SEAN McKITTRICK, p.g.a. | 製作 | ショーン・マッキトリック, p.g.a. |
| | JASON BLUM, p.g.a. | | ジェイソン・ブラム, p.g.a. |
| | EDWARD H. HAMM, JR., p.g.a. | | エドワード・H・ハム・Jr., p.g.a. |
| | JORDAN PEELE, p.g.a. | | ジョーダン・ピール, p.g.a. |
| Executive Producers | RAYMOND MANSFIELD | 製作総指揮 | レイモンド・マンスフィールド |
| | COUPER SAMUELSON | | クーパー・サミュエルソン |
| | SHAUN REDICK | | ショーン・レディック |
| | JEANETTE VOLTURNO | | ジャネット・ヴォルトゥルノ |
| Co-Producers | BEATRIZ SEQUEIRA | 共同製作 | ベアトリス・セケイア |
| | MARCEI A. BROWN | | マルサ・A・ブラウン |
| | GERARD DINARDI | | ジェラルド・ディナルディ |
| Director of Photography | TOBY OLIVER ACS | 撮影監督 | トビー・オリヴァー ACS |
| Production Designer | RUSTY SMITH | プロダクション・デザイン | ラスティ・スミス |
| Edited by | GREGORY PLOTKIN | 編集 | グレゴリー・プロトキン |
| Costume Designer | NADINE HADERS | 衣装デザイン | ナディン・ヘイダーズ |
| Music by | MICHAEL ABELS | 音楽 | マイケル・アーベルス |

## CAST

| | | | |
|---|---|---|---|
| Chris Washington | DANIEL KALUUYA | クリス・ワシントン | ダニエル・カルーヤ |
| Rose Armitage | ALLISON WILLIAMS | ローズ・アーミテージ | アリソン・ウィリアムズ |
| Missy Armitage | CATHERINE KEENER | ミッシー・アーミテージ | キャサリン・キーナー |
| Dean Armitage | BRADLEY WHITFORD | ディーン・アーミテージ | ブラッドリー・ウィットフォード |
| Jeremy Armitage | CALEB LANDRY JONES | ジェレミー・アーミテージ | ケイレブ・ランドリー・ジョーンズ |
| Walter | MARCUS HENDERSON | ウォルター | マーカス・ヘンダーソン |
| Georgina | BETTY GABRIEL | ジョージナ | ベッティ・ガブリエル |
| Andrew Logan King | LAKEITH STANFIELD | アンドリュー・ローガン・キング | レイキース・スタンフィールド |
| Jim Hudson | STEPHEN ROOT | ジム・ハドソン | スティーヴン・ルート |



# GET OUT

ユニバーサル映画提供/原題:GET OUT/2017年/アメリカ映画/カラー作品/スコープサイズ/ドルビーデジタル/上映時間:104分/字幕翻訳:種市譲二/配給:東宝東和



**GETOUT.JP**

発行日:2017年10月27日　発行者:大田圭二　発行所:東宝(株)映像事業部 東京都千代田区有楽町1-2-2　編集:(株)東宝ステラ 東京都千代田区有楽町1-5-2　デザイン:ダイアローグ
印刷所:(株)久栄社 東京都中央区新川1-28-44　定価:本体667円＋税　http://www.toho.co.jp



第89回アカデミー賞
助演男優賞ノミネート(マイケル・シャノン)
第74回ゴールデングローブ賞
助演男優賞(アーロン・テイラー=ジョンソン)
第73回ヴェネチア国際映画祭
審査員グランプリ
世界が感嘆した美しきミステリー！
『メッセージ』
エイミー・アダムス
『シングルマン』
トム・フォード監督最新作
『ナイトクローラー』
ジェイク・ギレンホール
ノクターナル・アニマルズ
脚本・監督:トム・フォード
エイミー・アダムス　ジェイク・ギレンホール　マイケル・シャノン　アーロン・テイラー=ジョンソン
アイラ・フィッシャー　アーミー・ハマー　ローラ・リニー　アンドレア・ライズブロー　マイケル・シーン
原作:「ノクターナル・アニマルズ」(オースティン・ライト著／ハヤカワ文庫)
FADE TO BLACK
DOLBY DIGITAL
ユニバーサル作品　配給:ビターズ・エンド／パルコ
FOCUS FEATURES
UNIVERSAL
nocturnalanimals.jp
20年前に別れた夫から
送られてきた小説。
それは愛なのか、
復讐なのか。
11/3
(金・祝)

4 988104 094216